

伊藤栄喜

岩手県北上市

技術を誇りに

「このルポに登場する経営者は〝特殊〟か〝特別〟な人たちだよ。俺はね、普通の農家なんだ。有機・無農薬栽培も、際限のない利益追求もしない。人間だから欲はあるけど、ほどほど主義でいいんだ」

謙遜か、それとも、ある種の自負なのか。伊藤栄喜はそんなふうに自らを語ると、顔中に笑みを広げた。

岩手県北上市の和賀地区。県内最大の大豆生産地で、伊藤は計約26haを耕作する。２００５年の作付けは、大豆14ha、小麦８ha、水稲３・８ha。

■「四十にして惑わず」というが、伊藤栄喜の農業経営は40歳から始まった。水稲から転作受託へと規模を広げ、機械力を駆使して地域の農地を守り続ける。採種圃の管理にプライドを見出し、新技術の実用化にも積極的に取り組む。常に前進し続ける姿勢と、着実さ。その両方を備えた経営者だ。（秋山基）





▲採種用の大豆は管理に手間がかかり、防除コストも高くつく。生育期間中に県種苗センターの検査も最低2回実施される。圃場には生産者名などを明記した札。「全国の人たちから見られていると思いながら、栽培しないといけない」と伊藤は話す。

そのほかに、冬場の換金作物として約６０００玉の菌床シイタケを栽培し、小菊も20ａで育てている。

作目の中で、特徴的なのは水稲と大豆の種子（原種）生産だ。県の種苗センターから委託され、コメはあきたこまち（２・８ha）、大豆はナンブシロメとスズカリ（計６・８ha）を栽培する。

「多収を狙わず、品種特性を生かし、防除を徹底するのが基本原則。種子はデリケートだから、手間ひまがかかる」と、本人は工程管理の大事さを語る。

収穫した種子は他県にも流通するため、生産者の責任は重い。発芽率90％が絶対条件とされ、異品種の混入は一粒たりとも許されない。また、採種圃には氏名や住所などを記した札を立てる義務があり、栽培過程が近隣の目にさらされる。

「そこに面白味があるんだよ。買い手はプロの農家だから、ごまかしはきかない。誰にでもできることじゃないからこそ、あえて好んでやっているんだな」

誇りと気概と、裏付けとしての技術。それらを伊藤が身に付けた道筋をたどるには、決して「普通」ではない、異色の経歴にまで遡る必要がある。

新・農業経営者ルポ／第16回

土をパートナーに、

「農業は定年後」と就職 大学勤務から裁判闘争へ

１９４７年、伊藤は３・５haの水田をもつ兼業農家に生まれた。父親は小学校の教員。田んぼを管理するのはもっぱら母親で、田植えや収穫時にだけ家族総出で働いた。

高校は花巻農業に進んだが、就農の意思はまったくなかった。

「農業は嫌いじゃなかったけども、営農は経済的に見合わないと思っていた。自分でやるのは、サラリーマンか公務員を定年退職してからでもいいかって感じさ」

高校卒業後は、花巻市内の私大に進学する。卒業は70年。当時は求人難で、就職先には事欠かなかった。様々な選択肢がある中、岩手県警の採用試験に合格し、警察官になろうといったんは決めた。ところが、警察学校に入校する直前の３月下旬、突然「母校の図書館司書に」という就職話が持ち上がった。

悩んだ末、伊藤はギリギリの31日になって県警に断わりの電話を入れた。在学中に司書の資格は取得していたし、「やはり母校で働く方が魅力」という気持ちが働いたのだという。この選択が人生にさらなる岐路を生むことになる。





▲あきたこまちの採種圃にした自作地。不良品が流通してしまうと、補償問題にまで発展するため、管理には細心の注意が必要と言う。

30代の半ばまで、図書館勤務は平穏だった。その間に結婚し、司書の仕事にもやりがいを感じていた。実務に通じた事務方として、時には理事会でも堂々と意見を述べた。物怖じしない性格が上層部との間に摩擦を生むこともあったが、同僚からは信頼を得ていた。

だが、ある年、学校の経営陣が変わると、立場は急変した。遠慮のない態度に目をつけられ、新経営陣から無理な出向命令を突きつけられたのだ。

「出向を拒否したら、即解雇ってわけだ。他にも同じような目にあった職員がいてね。労組を結成したら、委員長に祭り上げられちゃった」

以後、不当労働行為をめぐる裁判闘争が5年間に渡って続いた。大学側は組合員の切り崩しに出たが、7人が徹底的に争い、それぞれ勝訴を勝ち取った。

闘争が終わりを迎える頃、伊藤には再就職口が見つかっていた。母親が重病を患ったのはそんな時だった。

四十の手習いで就農 信頼される存在に

87年、不惑の歳になって、伊藤は決断を迫られた。若い頃は「農地は資産」と割り切っていたが、唯一の働き手である母が倒れた以上、「就農に迷いはなかった」と振り返る。

とは言え、すでに男女3人の子供を抱えており、家計だけは気がかりだった。「命がけで農業をやろう」と覚悟を決め、花巻で暮らしていたアパートを引き払った。

「それからは勉強したよ。本当に四十の手習い。『窒素・リン酸・カリ』から勉強し直した」

集落で農家の集まりがあれば、顔を出し、周りの話に耳を傾けた。篤農家と呼ばれる農家がいれば、その圃場に幾度も足を運んだ。

「農家が酔っ払って口にするのは、ほとんどが自慢話。コメがいっぱい採れた話ならまだいいけど、悪いコメを隠して食糧検査官の目をごまかしたとかさ。そんなことが手柄話のように語られる。本当に優れた人は口数が少ないんだよ。それでいて田んぼはきれいで、イネの生育がそろっている。そういう農家の考え方や作業の仕方を、圃場を見て吸収しようとした」

コメ作りは滑り出しから順調だった。知識や経験が乏しく、その分、先入観にとらわれなかったからか、収量はおおむね平均を上回ることができた。

「農協や普及センターの指導にも100%従ったね。だけど、彼らの指導は最大公約数的で、言うことに幅があるんだよ。その中から、圃場一枚一枚に合った水管理なり、追肥なりを考え抜いた。イネの表情に合わせた栽培を心がけなくちゃ、ダメだと思った」

米価が高値で推移したのが幸いし、側条施肥田植え機、コンバイン、乾燥機と、機械も次々に購入できた。やがて、集落内の転作麦を受託するようになり、これが規模拡大へのきっかけとなる。

裁判を続けていた頃、伊藤は地元紙やテレビのローカルニュースに何度も出ている。かつての活動や肩書きは、集落では周知の事実で、当初は明らかに「異分子」扱いを受けていたという。故郷といっても、保守色の強い農村にすんなり受け入れられたわけではないのだ。

しかし、40歳という就農時の年齢は、集落内の専業農家では「最年少」で、色々と世話を焼いてくれる先輩農家も多かった。本業で真面目に働き、農協を始めPTA、社教委員といった役職もまめにこなすうち、周囲の見方は徐々に変わった。

「『役害』って言葉があるんだよな。集落の役職に就かされるのは農家にとって害でもある。みんな断わり切れなくて悩むんだ。だけどきちんとやれば、評価につながる。周囲に真剣さが伝わる」

転作田をめぐる農家の心理 土と心で地権者とつながる

現在、伊藤は自作地約4・5haを



▲伊藤がコメ作りを始めてから、一気に機械化を進めた。自宅前の格納庫は、北海道の業者に注文。手前のトラクタ（85馬力）は、バーチカルハローを引くために購入した。



◀左側が伊藤の大豆畑。右は別の農家が管理しているが、圃場内も畦畔も雑草に覆われている。「畑の中がきれいなら、地主は協力してくれる。生き物が育っていると、放っておけなくなる」。転作田には、地権者と耕作者の信頼関係がはっきりと表れる。

土をパートナーに、技術を誇りに





▲（上）畑作用に買ったプラソイラ。ボトムプラウで堆肥や青刈り大豆をすき込むことで、排水不良を克服した。（左）ローラは小麦播種後に使うが、大豆作でも試している。「土の表面積が広がり、除草剤の効きがいい」



所有するほか、周辺の地権者に現物や現金で小作料を払う形で約6haを借地している。それ以外の約14haは転作の受託。以前の制度では、転作奨励金を地主と分け合っていた土地だ。奨励金が「産地作り交付金」に変わってからは、地主と耕作者の取り分に逆転が生じたが、貸借関係は基本的に存続している。

一時は、一人でコメを10haで作っていた時期があり、その機械力に期待する地主から、田植えや稲刈りを頼まれることも多かった。

しかし、伊藤は「自分の営農スケジュールを狂わされる」と話し、作業受託はしない方針を貫く。

「もうけるつもりなら、借地するより作業受託だと思う。作業だけなら豊作でも不作でも、こちらの収入に関係ないしな。だけど、やっつけ仕事はしたくないんだ」

まして、助成金を目当てにした転作作物の「捨て作り」には一切かかわらない。「だって土地に申し訳ないでしょう。俺にとって農地はパートナーであり、無から利益を生んでくれる存在だよ。その意味では、土地が〝お客さん〟と言ってもいい」

近隣では今、伊藤を含む4つの経営体が転作を受託している。自ずと競争原理が働き、地権者たちは、どこに転作を任せるべきかを見極めようとする。

地権者にしてみれば、貸した圃場の大豆や小麦の出来がどうであろうと、収入に変化はないはずだが、それでも、隣の畑よりは作物がよく育ち、雑草が生えていない状態を望むのだそうだ。実耕作者の管理が行き届いていれば、畦畔の除草にも協力してくれるが、逆に、圃場内が草だらけだと、返却を求めてくることもある。「それが農家の心理、心情なんだ」と伊藤は明かす。

このルポの取材当日は8月上旬、ちょうどお盆前だった。各圃場を回っていると、炎天下の午後、伊藤の大豆畑で畦畔の草を刈り、焚き火で燃やす農家の姿が目に付いた。

「あの人がここの地主。ああいう真面目な人の農地は土が良いから、作物の出来もいいんだよな……」

受託契約は農協が仲介したため、2人はまだ互いに言葉を交わしたことがない。だが、金銭だけでなく、土と心でつながっている。

「……ありがたいと思うよ」。黙々と体を動かす地主の姿に目をやりながら、伊藤はつぶやく。

排水対策を克服 不良品排除でなく、良品選別を

小麦作を始めたばかりの頃、伊藤は排水対策という課題にぶち当たっ





▲シイタケは㈱北研の菌床を使う。家族の高齢化による労働力低下を見込み、冬期の収入源として00年に導入した。8月上旬に袋の上面を開封し、9月～翌年3月まで収穫が続く。

◀北上市は小菊の産地。沖縄県とのリレー出荷でも知られている。栽培は主に妻に任せている。お盆直前に出荷は最盛期を迎え、親せきとともに調整作業が続いていた。

た。スコップを手に、人力で明渠を掘ってみたが、深層部の排水には効果がなかった。

収量は年々落ち、指導機関からは連作障害を指摘された。「畑作にとって水は仇。コメ作りとは180度違うってことだよね。水の力に頼れない分、土の力をいかに維持するかが問われる。これには苦労したな」

試行錯誤を繰り返したが、最も効果があったのは、有機物の還元だった。ボトムプラウで深く起こし、牛堆肥や青刈り大豆をすき込んだところ、排水が改善され、収量安定につながった。雑草の発生も減り、土の力を体感できたという。

現在の技術体系において、伊藤はプラソイラ、プラウ、バーチカルハローを「三種の神器」と呼ぶ。大豆作・小麦作双方で、「この3つは欠かせない」と語り、レーザーレベラーの導入にも関心を強めている。現状では1枚当たり最大30aほどしかない圃場を、いずれは大きく広げたいという願望があるからだ。

採種圃の水稲・大豆は言うまでもないが、収穫物については、とりわけ選別過程にこだわりを見せる。

「全体の中から悪いものを取り除いて出荷するっていう考えには満足できないんだよ。確かに悪いものを除けば、良いものが残るはずだけど、『はず』を誰が保証する？俺は全体から良いものだけを選んで出荷したいんだ」

2000年、地域で共同の大豆乾燥調整施設を建設した。その際には、主導的な役割を果たし、こうした考えをメーカー側や周囲に訴えた。

「正論のつもりだったけど、ケンカもしたな。こっちは裁判で鍛えているからね。しゃべらせたら誰にも負けない」

日系パラグアイ移民から学んだこと

岩手県からは、戦後、南米パラグアイに多くの人々が移住した。現地には日系人社会が形成され、農業の先駆者として活躍する人たちも多いという。

伊藤のいとこ6人も移民として彼の国に渡り、南部のピラポ市で農業に携わった。移民と留守家族という関係は長く続き、2000年、ピラポ岩手県人会が設立40周年を迎えた際、伊藤は記念式典に招かれた。それがパラグアイの畑作にふれるきっかけとなった。

地球の裏側で穀物や肉牛の生産に勤しむ日系人の姿には、感銘をおぼえたという。

「食料を生産する農民の使命と誇りを強く感じた。共済も保護政策もほとんど整備されていない。そんな厳しい環境で鍛えられた技術は、我々よりも数段上だった」

特に目を引いたのが、土壌の流亡を防ぐための不耕起栽培だった。「彼らは『ジレクト』って言っていた。ダイレクトつまり直播っていうことだと思う」

この方法を基に、伊藤は独自の立毛間播種を思いついた。東北のような寒冷地では、大豆と小麦の作期が20日間ほど重なる。同じ年に大豆から小麦へと転換するのは非常に困難だが、収穫前の大豆の条間（立毛間）に小麦を播種できれば、ローテーションが自在にできるという考え方だ。

帰国後、すぐに試したのは、播種に動力散粉機を使用する方法だった。播種時期と播種量に差をつけ、計約4haに小麦を播いた。覆土はせず、大豆の落葉を利用した。その結果、一部に発芽不良が見られたが、平均反収220kgを上げた。その後も同じ方法を取り、昨年は反当15kgを計1・5haに立毛間播種。反収は最高で439kgだった。

立毛間播種については、東北農業研究センターが「2年3作」「3年5作」による所得向上が可能との見方に立ち、専用播種機などを開発して

土をパートナーに、技術を誇りに



▲立毛間播種に使用する動力散粉機。その方法を真似る農家は多いが、「農業はオープンが基本」と、伊藤は技術を教え、頼まれればデータも提供する。





▲圃場が130数枚と多いため、全履歴をまとめた「カルテ」は、伊藤にとって経営の“右腕”。「一枚ずつの傾向と対策がすべてここに記されている。圃場の癖がはっきりわかるし、勘に頼らずに過去の記録に当たれば、どんぶり勘定を避けられる」。図書館勤務で身に付けた記録作りの能力を生かし、営農のシステム化を図っている。



伊藤栄喜

岩手県北上市

【プロフィール】

1947年生まれ。大学職員をへて自作地でコメ作りを始める。その後、転作大豆・小麦の受託を中心に据え、機械力を生かした経営を築く。94年から水稲、2001年から大豆の種子生産も始めた。そのほかにシイタケ、小菊を生産し、地元農協に出荷する。労働力構成は本人と妻、両親の4人。

いる。だが、機械自体が高額な上、播種のピッチを実際の圃場に合わせにくく、実用的ではないと伊藤は見ている。事実、北上市内の多くの生産者は「動散方式」を取り入れ、その技術は市外にまで広がりつつある。

「ただし、俺が考えているのは、連作障害を回避しながら、農地をいかに有効に使うか、どうやって作業効率を上げるかだからね。いっぱい作って、いっぱいもうけようっていう発想じゃないんだよ」

利益を追求する姿勢から、新たな技術が生まれ、知恵が創造される。そのことを十分承知した上で、爪先立った経営に走らないように、常に自己を戒める。伊藤が言う「ほどほど主義」は、そんな価値観として経営の重心を成しているのだろう。

今年、伊藤は就農から18年目を迎えた。手元には常に2冊の綴じ込みが置いてある。1冊は日々の作業や労働時間などを記した日誌。もう1冊は圃場一筆ごとに過去の全作業内容、収量などをまとめた記録、いわば圃場の「カルテ」だ。

「生まれながらのプロだったら、すべて頭に入るんだろうけどね」と、恥ずかしそうに言うが、過去の記録を追っていけば、130数枚に及ぶ圃場の癖がわかる。生産力や除草コスト、ローテーションの時期まで、すべてはカルテが教えてくれる。

「カルテを使う限り、油断や思い込みで失敗することはない。やっぱり、俺にはこれが合ってるんだな」

書き込まれた文字や数字は、自らを「素人」と位置付けながら、向上を目指してきた姿勢の証でもある。そして、遅れてきた経営者だからこそ、確立できる農業があることを雄弁に語っている。（敬称略）